rongorongo

茨城キリスト教大学
文化交流学科

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科　〒319-1295 茨城県日立市大みか町６－１１－１　TEL 0294-52-3215　FAX 0294-52-3493

アジアンバザール＆カフェ

昨年11月2日、3日に学園祭が行われた。文化交流学科を始めとした学生達が、自ら買い出しから販売までを行なう「アジアンバザール・カフェ」が今年も開催され、賑わいを見せた。

今年度はインドのチャイも登場！

文化交流学科3年次　鈴木麻由

学園祭で恒例となったアジアンバザール、今年で六年目を迎えました。併設のアジアンカフェは、フォーやベトナムコーヒー、スコーンとココナツプリン、ゆず茶とかりん茶などを提供しているお店です。

当日は11月初めとしては肌寒かったこともあり、カフェの暖かい食べ物をたくさんの人が味わってくださいました。

定番メニューであるベトナムフォーを4種類用意したのですが、先輩と後輩が協力し作り方を試行錯誤したかいあってどの味も好評をいただけました。

今年は毎年恒例のベトナムコーヒーとゆず茶かりん茶に加え、新たに登場したチャイが大好評でした。チャイはインドの庶民的なミルクティーで、香辛料が入った茶葉を使用します。

「チャイを飲んでほっと一息ついて体が温まった」「アジアンな空間でゆっくりくつろげてよかった」という声を聞くと、作っている私もほっとして和かな気持ちになりました。

カフェから見えるところに今年の夏にカンボジアで行った日本語英語教育ボランティアの様子を伝えるスライドの映像を映していました。それを見て興味を持ってくれた方と、カンボジアや東南アジア旅行などの話で盛り上がることもできました。

普段はカンボジアやアジアンフードに触れる機会のない学生や地域の方と、フォーやコーヒーを通して文化交流の話に花が咲くのはアジアンバザールカフェならではの魅力だと思います。

今年来てくれた方も来れなかった方も来年のアジアンバザールカフェに是非来てみてくださいね。

10号館：カフェでは学生や教員がお茶を楽しんだ

知ってほしい　沖縄のこと

12月19日（土）、学生主催で沖縄戦についての映画が上映されました。

挨拶のときには感極まって

文化交流学科4年次　小松令菜

〝ひめゆり学徒隊〟それが何を意味するか、わかる人はどれぐらいいるのでしょうか。何年か前の私ならきっと、「沖縄戦で働いた人達」くらいにしか思わなかったと思います。

私は大学2年次に、沖縄に一年間国内留学をしました。沖縄に住んだことで、歴史、文化、環境、言葉……教科書や本からだけでなく、沖縄に息づいているものを自分の目で見ることができました。

沖縄には、沢山の戦跡やガマが残されています。ガマには、戦争で亡くなった方の遺骨がまだ散乱しています。道路を走っている時にふと横を見ると、そこは金網で仕切られた米軍基地だったりします。今は復興を遂げている沖縄ですが、まだ戦争の爪痕がいたる所に残っているのです。

私はそんな現実を目の前にして、自分がいかに無力かを感じました。沖縄のために何かしたい、でも自分の手で沖縄を変えることはできないのだと何度も悲しい気持ちになりました。沖縄にとって戦争の記憶や米軍基地は、すでに〝日常〟となっていたからです。

茨城に帰ってきてから、自分にできることを考えました。沖縄のことも内地のことも知っている私ができること、それは「沖縄のことを日本本土の人たちに伝えていくこと」でした。直接的に

【2面へ続く】

授業感想のご協力をお願いします。

次号の４月号にて、『学生の目で授業ウォッチング』と題し、実際に文化交流学科内の授業を受けた学生の感想集を掲載しようと企画しています。

IC-UNIPAとプリントの２種あるので、ご協力をお願いします。

授業を受けてみての良い点・悪い点など、様々なご感想をお待ちしています！！

10年1月号目次

1面
◆アジアンバザール報告
1～2面
◆映画「ひめゆり」上映報告
2～3面
◆留学生報告
3面
◆「いのちの講演会」報告
◆文化交流体験予告
4～5面
◆堀口先生インタビュー後篇
6面
◆ボラサポ報告
◆編集後記

【1面続き】

沖縄を変えることはできなくても、本土の人に沖縄を知ってもらうことにも意味があるのではと思いました。その思いが、今回の映画『ひめゆり』の上映に繋がったのです。

当日は多くの方にお越しいただき嬉しい気持ちで一杯でした。感極まって、午前の部では挨拶の際に声を詰まらせてしまいました。生存者の方たちの生の声が、来場者の方々に届いていれば幸いです。

最後に、上映まで共に活動してきた実行委員、お世話になった教職員の皆様、ご来場いただいた皆様、この映画に関わったすべての方に感謝します。ありがとうございました。

伝えていかなければいけない

文化交流学科4年次　伊東佐織

私は去年から沖縄文化交流実行委員会に所属しており、去年行った沖縄文化交流会も多くの方の協力を得て、無事成功させることができました。

その経験から、去年の交流会で行った芸能や食文化とはまた違った視点で沖縄をもっと知ってもらえればいいな、と思い今年も沖縄文化交流実行委員として、この「ひめゆり」の映画上映を運営していこうと考えました。

私達はまず、この映画を上映するにあたり沖縄戦について学び、沖縄での平和学習をしましたが、過去について知らない事ばかりだなぁと寂しくなったのを覚えています。信じられないけど、戦争は実際にあった事。映画に出演されている、当時のひめゆり学徒隊の方々の気持ちや言霊を受け取った時、私たちも伝えていかなきゃいけないと本気で考えました。上映準備の活動として、特にポスター作りや宣伝に力を入れてきました。映画の世界観や訴えたいことを前に押し出し、一目でひきつけられる様なポスターが出来ればいいなと思っていたので、少しでも皆さんの心に何かが届いていたら嬉しいです。

正直、準備期間は目の前にあるものを作って行く事で精一杯でした。しかし当日、予想を上回るお客様にお越し頂いた事や、その方々からのアンケート、また同時に行った「あなたの大切な物は何ですか？」展での言葉には沢山の気持ちや感想を頂き、私たちがこの映画を見て感じた〝伝えたい事〟が一人一人に伝わり、映画を上映してよかったなぁと改めて思います。私自身、軽い気持ちで参加した今年の沖縄文化交流実行委員会ですが、この映画上映に関われた事を誇りに感じ、また一人でも多くの人に平和である事の大切さ、命がある事の大切さを伝える事が出来ればいいなと考えています。

８号館：地域の方や教員などが来場

留学して半年が経ちましたが日本の暮らしや学校はどうですかという観点で留学生に書いて頂きました。

留学生が日本で感じたこと

一生忘れられない

キム　スルキ

今年の茨城キリスト教大学長期交換留学生「キム・スルキ」と申します。

あっという間に一年という時が流れ、来月は帰国の準備をしなければならなくなりました。この一年、茨城で留学しているうちに、楽しいことや苦しいことなど、いろいろなことがありましたが、それでも笑顔で帰れそうだと思います。

留学生に向かって優しくしてくださった先生方々、いつも心強い国際交流部、そしてロックバンド・ライブの夢を叶わせてくれたＢＢＦというサークルの仲間たちなどなど……。

また、学校とは関係ないのですが、韓国語家庭教師のバイトを通して知り合うようになったおばあさん方々からも言葉では全部言えないほど、いろいろなこと（生活面として）の助けや、ぬくもりをもらいました。

私は元々、日本の音楽（ロック）が好きになって日本語を始めたので、「日本で日本人の仲間と日本の音楽をライブでやってみること」こそが一番の優先的な目標でした。もはやその夢は叶いましたから、悔みなんかはありません。

成田国際空港に着き、夜遅くなってやっと茨キリ大学に到着し、その日国際交流部の先生方々から歓迎してもらったことが、まるで昨日のことのようです。

そして私は1月15日、「スルキお別れイベント・サヨナラライブ」をもって、ここでの留学生活を終えたいと思います。

一生忘れられない２００９年になりそうです。皆、どうもありがとうございました。

写真左 キム　スルキさん

いのちの講演会　～いのちを大切にしよう～

11月18日、8号館の大教室にて『いのちの講演会』が行われた。11月25日～12月1日は『犯罪被害者週間』であり、いのちの重みを知る思いが込められている。

高橋シズエさん

一九九五年3月に起こった地下鉄サリン事件の被害者ご遺族である高橋シズエさんが講演をされた。地下鉄サリン事件から14年という月日が流れても尚、被害者遺族の傷は癒えることはありません。私は、この講演会を聴講する以前にメディアを通し、オウム真理教が行ってきた様々な事件を見ていて、ご遺族の無念さや憤りなどを強く感じていましたが、実際に私たちがメディアを通して共感できたと感じている感覚は、当事者の実体験のほんの一部でしかないのだなと思いました。

メディアがカメラで捉えているものは事件に対するものや被害者に関するものであって、取り残された被害者遺族のその後の心情に耳を傾けることが少ないからです。むしろ、この事件が起こった際には、遺族の心情を考えずにメディア側は遺族をも巻き込み事件を取り上げたという。高橋シズエさんは、この異常なまでのメディアの対応を「メディア・スクラム」と呼んでいました。

メディアばかりでなく、周囲の反応や警察側の対応も冷たいものでした。例えば、サリン事件で被害に遭われた方に対して、「サリンちゃん」というあだ名を付けたり、事件のせいで障害を抱えてしまい、通勤や体調が優れず職場を遅刻・早退をせざる負えない方に対して「買い物する暇が出来ていいわね」など、相手の心情を考えずに傷つけてしまうケースがあったそうです。

司法解剖が終了したことも高橋さんに告げられずに遺体が移動されてしまったとか、また、法廷に関しても気持ちを汲み取ってくれなかったり、経済的なものに関しても保証されるかどうかの有無の差が非常に激しく、車いす生活を強いたれた人は多大な費用がかかるそうです。

これらのことを聞いていて、「私たちに出来ることとってなんだろう」と思ったときに、私たちは事件の本当の裏側を知るべきなのだと思います。

現在のメディアはオウム真理教の事件が起こった後に被害者遺族の心情を考慮した20項目のアンケートを取材の前に遺族側に渡しているといいます。また、事件の加害者である元オウム真理教の一部の方からは事件に対しての謝罪が高橋さんにあったとのこと。

私たちに出来ること。それは、事件に対する『共感』よりも『理解』ではないだろうか。

〔編集部・長谷川〕

今年も、行きます
文化交流体験でのカンボジア

2月9日から23日まで、今年度も斎藤先生・染谷先生・岩間先生引率の元、文化交流体験が行われます。
（※今回は、単位の取得は出来ません。）

昨年度はタイ・カンボジアの2カ国でしたが、今年度はタイに変わりベトナムになりました。

ベトナムでは、現地大学との交流会があります。またカンボジアでは、シェムリアップにあるアンコール大学との提携を結ぶ調印式も行ないます。その他にも、児童養護施設や小学校などを訪問する予定です。

次号の4月号にて、その報告記事を掲載予定ですのでお楽しみに。

カンボジアのアンコールワット

留学の意義
辺　学楠

私は中国の天津から交換留学生として今年の4月に日本に来た辺学楠です。あっという間に時は過ぎ、日本に来て八ヶ月も経ちました。日本での生活にもずいぶん慣れてきました。この八ヶ月の留学生活を通して、日本語の勉強だけではなく、それ以外に日本の文化も体験しました。日本での生活が私にそれぞれのことを教えてくれました。

日本で一番心に残ったことは日本の清潔さです。例えば、ごみの種類によって捨てるところも違います。また日本の電車が中国の交通手段よりも便利だと思いました。

日本に来て、とても感心したことは学生たちがアルバイトをするということです。中国では学生がアルバイトをしながら学校に行くことは広く行われていません。

実は、私は大学に入る前、将来は教師になりたいという希望がありました。日本に留学するチャンスをつかんだ今、中国と日本の教育とか文化などについて研究することは将来の就職についてきっと役立つことと思います。今回の留学により学んだ日本の文化や教育に対する考え方などを深め、卒業後は先生として働きたいと思います。

私は茨城キリスト教大学に入るとすぐ、学校の茶道部と華道部に入り、お稽古をきっかけに、日本の文化をしっかり体験しました。実は、今熱中していることは茶道部のお稽古です。今でも週一回茶道部のお稽古にずっと参加していて、すごく楽しいです！　けれども今になっても、慣れないのは正座をすることです。足がとても痺れます。しかしそれでも茶道についてのいろいろなお稽古を学んでいます。そして、何より、茶道によって、日本人の静かで和やかな感性を感じ取ることができました。

当然のことながら、時には、文化の違いや歴史観の違いなどで、深く悩むこともありました。しかし、私にとっておそらくそのことが留学の意義なのです。私はこの留学期間中に多くの日本の文化について学んでいきたいと思っています。

華道部での作品

堀口悟先生 ロングインタビュー 後篇

前篇から引き続き、後篇では日本を伝えるということについて読みいただきます。日本語教師に興味がある人に必見の話や先生から学生へのメッセージなど盛りだくさんの内容です。

日本を伝える最前線

―留学生に日本語を教えるとき、どんな時にやりがいを感じますか。

私は毎週授業で教えていますが、学生の皆さんも、日本語教育の資格科目をとっている人はもちろん、そうでない人でも、希望者には私や染谷先生やヨシバ先生の授業のアシスタントに参加して頂いています。毎年年度末に募集しますので、皆さん、ふるって応募してください。

日本語教師の特色は、おそらく留学生の個人の相談にまで与るところですよね。日本人学生でも、身の上相談に応じることは当然ありますが、留学生の場合は、文化ギャップの悩み相談が多いです。文化の架け橋になるようなところがあると思います。

日本語教師は、国内あるいは海外で教えることになったら、日本人の代表として見られてしまいますからね。その人の歩き方から、表情から、驚いたときの反応の仕方まで、「日本人というのはこうなんだ」というように見られてしまいます。日本語を教えるというのは、同時に日本文化そのものや、日本そのものを教えてしまうみたいなところがあってね。そこが大変なところであり、責任重大でもありますね。「間違ったことを言えないな」という。言葉だけじゃなくて、文化や考え方や人柄などです。私は日本語教師にふさわしくないなと思うことはたくさんありますが、日本を伝える最前線に立つのが、日本語教師ですからね。

堀口先生著

必ずやりがいを感じられる

授業をしていて嬉しいことは、韓国人と中国人とが仲良くしてくれた時です。どの国の学生にしても、日本に留学するのだから、日本人以外の外国人には、最初は無関心な場合が多いのですが、日本で同じクラスになった異国人同士が日本語でコミュニケーションしているというのは、日本語教師としては感動ですね。橋を架けたなぁと思いますね。日本語教育は、日本だけでなくて、日本以外の国同士を繋ぐこともあるんですよ。責任重大だけれども、すごい仕事だなとは思いますね。日本語教師になれば、誰でも必ずやりがいを感じると思います。

見方を変えてみる

―日本語教師の資格について主専攻と副専攻の主な違いとは何でしょうか。

基本的には、修得単位数の違いです。それと、大きいのは、教育実習に行くかどうかです。主専攻は、四年間で48単位の習得を目指して、本格的に学びます。教育実習は、実際にボランティアサークルや日本語学校に行って、授業を見たり自分で教えたりする体験を積みます。副専攻は、26単位以上の習得を目指し、日本語教育のエッセンスを学びます。

公的には、主専攻でも副専攻でも、同等の教員資格（正しくは「日本語教育施設教員資格」）とされています。実質的な違いは、主専攻の方が、日本語教師として就職するときに有利ですし、職業としてもボランティアとしても、実際に教えた経験（教育実習）があるか無いかは、大きな違いです。

副専攻の人は、できるかぎり本学での日本語の授業（留学生を対象として染谷先生・ヨシバ先生・堀口などが担当し、全て日本語で行われる授業）のアシスタントを経験されることをお勧めします。

授業を取るとき、自分の学科の科目と日本語教育科目とが重なるように取っていくと、副専攻はかなり楽にとれます。主専攻は、科目数が多くなって少し大変ですが、見方を変えれば、たくさん勉強しても本学内で取ればほとんど無料だというメリットがあります。

つまり、一応日本語教師資格を取っておこうかと思ったら副専攻でも良いけれど、本当に教える力を付けたいと思えば、主専攻にチャレンジしてください。一般の大学で出している「日本語教員資格」は、本学でいう副専攻ですから、副専攻取得の人も堂々と「日本語教育施設教員の資格を持っている」と言ってもらって結構です。ですが、私の本音から言えば、日本で日本語の教師になるには、副専攻の26単位だけでは不足だと思います。せめて、授業アシスタントは経験して頂きたいと思います。ただし、海外で日本語教師として就職する場合は、副専攻でも十分だという日本語学校が多いようです。

国と文化の懸け橋として

基本はコミュニケーション

ところで、主専攻が取得できるのは普通、「日本語学科」とか「日本語教育学科」あるいは「言語学科」などを持つ大学です。その学科の卒業生は、たいてい日本語教育一つを専攻して卒業するので、主専攻というわけです。文化交流学科の皆さんの主専攻は、文化交流学ですよね。主専攻とは、原則として大学四年間で中心的に学ぶものです。ですから普通、「日本語学科」など以外の学科を卒業した人が日本語教育主専攻資格を取るためには、日本語教育主専攻学科をもつ大学にさらに四年間在籍しなければなりません。ところが、うちの大学の文学部の場合は、文化交流学（あるいは英語学や児童教育学）と日本語教育学と両方を主専攻できるんです。普通

本物の異文化が降ってくる

は八年かかるのを四年間で両方。うちの大学はすごいと思います。そういう所はめったに無いと思うので。

「なんでそんなことが可能なのか？」

ひと言でいえば、日本語教育も文化交流も基本はコミュニケーションですので、勉強すべき事が大変似ているんです。だから、学ぶべき科目も共通性が多くて、文化交流学の科目を取ったら、それが同時に日本語教育の科目でもある、という事態が多く生じます。それを利用して、いわば大学2つ分の専攻を取ってしまうわけです。

寝転がりながらでも読める作品

—お勧めの日本文学はありますか？

すごく沢山あるんですけど……イチオシは阿部公房ですかね。大江健三郎も好きですね。その二人がノーベル賞を取ると思っていましたから。

—学生時代好きだった阿部公房の作品を教えてください。

『砂の女』かな。読みやすいと思います。阿部公房の小説は、一般的に少し難しいんです。大江健三郎さんがノーベル賞を取った時、作品は難しいなんて言われていたけど、大江作品は実は寝転がりながらでも気楽に読めるんですよ。阿部公房の難しい作品は寝転がりながらではとても読めないですね。気を抜いていたら理解できないと思います。ですが、気軽に読めるタイプの作品もあって、『砂の女』は寝転がりながらでも読めます。ストーリーがとても面白いので、彼の作品の中では一番のお勧めだと思います。

千年の時を越えて

—平安朝文学の魅力はどんなところですか？

案外、現代と似てるんですよ。貴族しか描いていない、庶民がどうしていたかは全然記録に無いので、貴族しか分からないところは残念ですが、平安時代の貴族と現代の一般人は非常に似てるところがありますね。私は毎月のように『源氏物語』の講演や勉強会の講師としてお話をするのですが、そうすると、今、日本で起こっている事件を例にしてそこからお話することが多いんですよ。

—現代と共通する部分が多いというのには驚きました。

そうなんですよ。社会や考え方もそうですし、政治なども似た動きをするんですよね。派閥争いみたいなものもあります。『源氏物語』でも、政治みたいなところはよく表れていてね。物の考え方なんかも今と同じで、合理的なんですよ。宗教に関してもそうで、当時はあくまで仏教が中心ですけれど、紫式部は仏教にやや懐疑的でしたし、千年の時を越えて共通する部分があるんですね。平安時代は戦争が無い時代だったので、今の時代ととても似ています。それから、あまり男女の差がないってところですかね。今は男女の差があまりないじゃないですか。文化が熟してくると、男女の差があまりなくなってくるのは世界的な傾向です。

今、学生だからこそできること

—学生へのメッセージをお願いします。

文化交流学科の学生にはもっと卒論を書く人が増えると良いなと思いますね。大変だけれども、大学の勉強の集大成になるものだからね。大変だから損得で考えれば損なのかもしれない勉強の仕方を鍛えられるなんて大学生以外ないですよね。それが、一生の財産になるのですから。なので、「文化交流学科の学生はもっと卒論を書こうぜ！」ということが頭に浮かびましたね。

あとは、なるべく早いうちに国外経験をしましょう、ということです。「日本にいたって海外の勉強はできる」と言う人がいますが、それは実際に何度も海外体験している人の話で、一度も行かずに日本だけで勉強できる、なんて思うのは、単なる無知です。国内では、自分からたくさん調べて想像しなければなりませんが、海外に出れば本物の異文化がシャワーのように降ってくる世界ですから。異文化に触れなければ、文化交流の授業をしても実感もないし、何をやっているかわからないでしょ？（笑）

日本を外から見ると知れること

—外に出てわかることも多いということですね。

例えば、地球の外に出て初めて地球が青いと分かるわけで、地上にいて誰も地球が青かったなんて知らなかったわけだよね。だから、日本がどんな色をしているかなんて、日本の外から見ないと分からないよね。中にいては見えっこないんだからさ。でも、文化交流学科の先生方は、外からの目を持っているから、無意識にやれば、つい、外からの目を知っている人向けの授業をしちゃうよね。中しか知らない人はそんな授業は、ちんぷんかんぷんでしょうね。なので、海外に行ったことがない人は早く行って欲しいです。

以前、4年生で初めて海外に行って泣いてた人がいましたよ。4年の時に初めて韓国行って、帰るときに男泣きで泣いているから、「韓国に感動して泣いてるの？」と聞いたら、「俺の四年間はなんだったんでしょう、先生」と言ってね。もっと早く海外に出ていなかったことを後悔する悔し涙だったんです。海外に出て初めて1年次から学んだことが肌身でわかったんだけれども、学んだ大半は実感がなかったので忘れてしまっていたんですね。それで、わかったのは嬉しかったけれど、忘れてしまった悔しさの方が大きかったというわけです。それで4年で初めて海外に行って泣きながら帰ってくるという。なので、是非早く海外へ行って下さいということです。

—今日は日本文化に触れながらお話を聞かせて頂きとても有意義な時間でした。

お香を焚く堀口先生

香りを楽しむ編集部員 松本

アジアンボランティアサポート基金

IC-ANN

1号館ラウンジで募金を呼びかける　写真左：鈴木さん

ボランティア・サポート基金よりご報告です。

12月7日～18日にわたり、1号館ラウンジと、学生会館にてアジアンボランティア・サポート基金の募金キャンペーンを行いました。たくさんのご協力、ありがとうございました。大不況の中、六万円ほどの基金が寄せられました。

この募金は毎年夏季休業中にカンボジアにて行われる「日本語・英語教育ボランティア」や、現地の学生の学業支援などのボランティア活動をサポートする目的で使われています。

また、一昨年はミャンマーの大洪水や四川省の大地震の被災者をサポートしたように、要望があれば様々な方向に援助をしています。学部や学科を問わず、学生、教員、聴講生などが呼びかけに参加。通称「ボラサポ」として活動の規模は広がっています。［藤田］

今回は募金の呼び掛けに加え、アジアンフードを販売。日本ではなかなか手に入らない品物を手に取り、「これはどんな味ですか？」と尋ねる学生達とボラサポのスタッフの交流が印象的だった。ここでの売り上げも、募金のお金に充てるそうだ。フォーと呼ばれるベトナムのヌードル一五〇円、ベトナムのバナナキャラメル50円など、手軽な金額から募金に協力することができる。

［編集部・佐々木］

ベトナムのヌードルやキャラメル

ロンゴロンゴでは編集部員を募集しています！

■毎週昼休みにミーティングをしているので、ぜひ一度見学に来てみてください。今年度は、全員が文化交流学科の学生で活動していますが、他学科の方でも参加できます。3年次が4名、4年次が1名の個性豊かな部員が揃っています。

藤田悟先生を始め、多くの方の協力と学生の手で新聞ができるのはロンゴロンゴに参加してから感じた楽しさです！

［佐々木］

■編集作業にやりがいと感じています。自分でデザインを考えたロゴを作成したものが、実際に新聞になると非常に感動的です。また、文化交流学科の先生のインタビューというものを毎号載せていますが、その為に行うインタビューがとても面白いです。授業では絶対対話してくれないような昔話などが直接聞けるので、新鮮味があり、見方が変わりますよ！

ロンゴロンゴに入るまで、文化交流学科が様々な活動をしていることは曖昧にしか知りませんでしたが、取材という手段で関わることで知ることができ、文化交流学科をより知ることができました。

文化交流学科では様々な活動をしており、私たち「ロンゴロンゴ」もその一つです。入って絶対に損はないと思います。一緒に文化交流学科を盛り上げていきましょう！

［4年次　鈴木英二］

写真左から、長谷川、松本、笹沼、佐々木

編集部員を募集しています！

ミーティング：毎週水曜日　昼休み

3号館5階　編集室にて

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で昔作られていた「物を言う板」です。この板には文字のようなものが書いてありました。この文字はまだ解読されていないそうですが、これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。

編集後記

◆時もあっという間に過ぎ、rongorongoに関わるのも今号が最後となってしまいました。あまりお役に立てなかったですが、充実した時間でした。みなさんもアクティブに活動をして、良い学校生活を送って欲しいと切に願います。堅苦しい最後になりましたが、今後ともrongorongoをよろしくお願いいたします！（笑）それでは、また。

［鈴木英二］

◆この季節は少しでも暖かいところにいたいですね。中学校の卒業記念で貰ってからずっと育てているペキラの木は気温が低くなると葉っぱが小さいまま成長が止まるのです。（冬眠？）丈夫なので育てるのにおすすめの植物です。

［松本千里］

編集に興味のある方は、ご連絡ください。質問や感想などもお待ちしています。

●編集部メールアドレス

rongorongo_hensyuubu-owner@yahoogroups.jp

●本紙WEB版はバックナンバーを含めて大学のHPでごらんになれます。

http://www.icc.ac.jp/univ/bunka/rongorongo/rongorongo1.htm